

弘前れんが倉庫美術館と松の湯交流館 —青森県弘前・黒石市見学会のハイライト

土井 良浩 弘前大学

1. はじめに

東北支部では10月17、18日の二日間にわたり青森県弘前・黒石市で見学会を実施した。初日はJR弘前駅に集合して駅前の複合施設に立ち寄り、遊歩道を経てメインストリート・土手町通りを歩き、本年7月にグランドオープンしたばかりの『弘前れんが倉庫美術館』を見学した。二日目はローカル線・弘南鉄道弘南線で黒石に移動し、銭湯だった建物を交流施設として再生した『松の湯交流館』を起点に、伝建地区であるこみせ通りを巡った。本稿では見学会のハイライトとなったふたつの再生建築物を紹介したい。

2. 弘前れんが倉庫美術館（弘前市、写真1）

美術館の元となった煉瓦倉庫は、1900年代初頭、りんご園などがあつた場所に実業家・福島藤助が酒造工場として建てたものである。福島は当時高価だった煉瓦造りとした理由を「かりに事業が失敗しても、これらの建物が市の将来のために遺産として役立てばよい」と語っていたという。その後、所有が実業家・吉井勇に移り、1954年に日本で初めて大々的なシードルの製造が行われ、この事業はニッカウヰスキーが引き継いだ。1965年には工場としての役割を終えた。以降は備蓄米倉庫として使われる等、影で地域を支えたが、2006年に市民ボランティアの運営により弘前出身の芸術家・奈良美智の個展が開催され話題を集めた。2015年に市が芸術文化施設として整備するために取得し、多数の企業が参画して設立された新会社によるPFI事業を通じて美術館として新たな命が与えられた。

「記憶の継承」と「風景の再生」をコンセプトとした建物の改修は建築家・田根剛が担当した。既存煉瓦壁を鋼の棒で貫く等、外観を保ちつつ構造を補強する工夫がなされている他、「弘前積み」と名付けられた特殊工法で煉瓦を組んだエントランス、光の当たり具合で表情を変える「シードル・ゴールド」のチタン製の屋根等、見所の多い建築作品に仕上がっている。他方で、ソフト面において、「従来の収集・保存型の美術館から創造・創作型の美術館へ」という考えの下、アーチストインレジデンスによる新たな作品制作とその展示・収蔵という一連の流れによる“弘前ならではのコレクション”づくりを目指している点はおもしろい。美術館の隣にはカフェショップが設置され、地元食材を使用した食事を愉しめる。内部にはシードル工房が併設され、そこで生産され

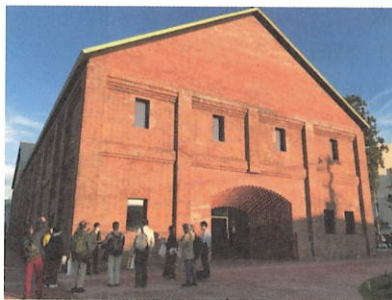


写真1 弘前れんが倉庫美術館（弘前市）

たオリジナルシードルは勿論、市内産の様々なシードルも満喫できる。

3. 松の湯交流館（黒石市、写真2）

こみせ通り^{注)}沿いに位置する『松の湯交流館』は、もともと江戸期の建築で当時は旅籠だったと伝えられ、その後銭湯に生まれ変わり1993年まで営業していた。旅籠時代は旅人と地元民が情報を交わす場所であり、銭湯になってからも地元民が日々の情報を交換し、経験・知恵を受け継ぐ「コミュニティの場所」であった。こうして人々の交わりを生み出してきたこの建物を再び交流施設として甦らせるべく、市が建物を取得して、市民の声を集めて修築し2015年にオープンした。現在はNPO法人横町十文字まちそだて会が指定管理している。普段は無料休憩所として一般市民、観光客や学生等に用いられているが、ギャラリー等としてのスペース占有も可能であり、観光案内、地元物産の販売機能も併せ持っている。NPOの企画によるイベントも多数開催され、まさに市民が集い交わる場となっている。本館と同時に改修された裏手の蔵にはカフェが併設され、黒石には珍しいエスニック料理を味わうことができる。

4. おわりに

以上のふたつの建物の再生は古きものの成り立ちを見つめ直しつつ新しい息吹を与え、新たな価値の創造を目指す試みである。現在、弘前市では美術館に接続する道路や鉄道駅前の広場等の整備を進め、黒石市もこみせ通りの電線の撤去や路面整備等を実施し、点を面へと広げ、歩いて愉しめるまちづくりを推進している。今後の両市の取組に注目していただければ幸いである。

注) 「こみせ通り」の成り立ちや現状については、本誌342号の以下の記事を参照のこと。北原啓司「雪国だからこそ生まれる都市のデザインのセンス」、青森県黒石市「雪国における伝統的まち並みの保存と活用」



写真2 松の湯交流館（黒石市）